令和８年度 第１回 高知県立図書館協議会・高知市立市民図書館協議会 議事録

〇日時

令和８年７月 23 日（木）9：30～11：30

〇場所

オーテピア４階 集会室

〇出席者

別紙出席者名簿のとおり

〇開催内容

１ 開会

県立図書館長あいさつ

会長・副会長の選出

議事録署名人の選出・・・田村委員

２ 議事

（１）第２期オーテピア高知図書館サービス計画の取組状況について

（２）その他

３ 閉会

市民図書館長あいさつ

【委員】

様々な図書館サービスの話を聞かせてもらったが、図書の受入冊数の減少が気になった。雑誌の受入タイトル数の減少は、廃刊に伴う減少もあるかと思うが、資料費の削減の影響で受入冊数も減っているのであれば心配である。また、地域資料の受入れについて、昨年『あんぱん』の放映に伴い、高知こどもの図書館で資料提供が必要なことがあった。その資料は、やなせたかしさんがバッハについて書いたものであるが、県内では香美市立図書館かみーるにしか所蔵がなかった。地域資料、郷土作家の

資料が必要となったときに、オーテピアにない資料があるということは残念に思った。オーテピアがすべてを担う必要はなく、各図書館が特色のある資料を集め、県内の図書館にあればよいという考えもある。しかし、郷土にゆかりがある作家の資料は、オーテピアが所蔵してほしいと思った。また、受入冊数の減少によって、地域資料の所蔵・収集力が削がれていくことがあれば心配だと感じた。

【事務局】

資料の受入冊数の減少については、６年度から７年度にかけてかなり減っている。購入分は全体で 4,719 冊減っており、県は、全体の資料購入費は６年度から７年度にかけて変わっていないが、電子書籍の購入分に予算を多く配分した関係で、紙の資料の受入冊数が減っている。市民図書館は、６年度は予算全体の配分の中で資料の購入に充てる部分が多かったが、逆に７年度は通常に戻った。県市それぞれ 2,300 冊から 2,400 冊ぐらい減り、全体で 4,800 冊ほど減少した。今年度は配分を変えているので、前年度ほど大きく減ることはないと考えている。また、雑誌は廃刊が進んでいることや、デジタルでしか出版しないものも相当数増えている。年度当初に廃刊が分かっていれば別の雑誌を定期購読という形で予算を充てることができるが、県では年度途中からの変更は予算的に難しく、全体として雑誌は右肩下がりの状況にある。

【事務局】

郷土資料の受入れについて、やなせたかしの本がオーテピアになかったのは非常に残念だと思う。オーテピアとして、地域資料は基本的に収集するという方針があるが、発行年によっては収集できていないこともある。図書以外の CD などについても、郷土の人が関わっていれば積極的に集める方針であり、収集から漏れていれば利用者からリクエストをもらって購入するようなこともある。もしそういった気づきがあればご意見をいただき、積極的にそろえていきたいと思う。

【委員】

資料に目を通したが、図書館の古いイメージと違い、横に広く、様々な事業をされていると感じた。今日の説明を聞くなかで、１つの建物の中でこれだけ多くの分野の

ことをしているということが分かった。

分室では、貸す本はあっても借りる人が減ってきた。また、地域の子どもたちが減ってきている中、小学校と分室（ふれあいセンターの図書室）とで何かできないかと思った。

先日、ふれあいセンターの図書室担当と近くの学校に学校図書館を見せてもらいに行った。学校図書館に児童向けの本がたくさんあるのに、分室にも来てもらえるかと言えば難しい。ふれあいセンターの図書室には、どのような形で子どもたちに来てもらえばよいのだろうか。

また、子どもが少ない代わりに、一人住まいの高齢者が多くなっている。本を借りにきませんかと話しても、目が見えない、小さい字を追うことが厳しいと言われ、活字が大きい本もあると話すが、探して借りるところまではいかない。高齢者は、バリアフリー資料を自分が借りてもよいのか分からないという気持ちがある。間口を広げ、読書が困難な人も使えるコンテンツが増えたらよいと思った。また、高齢者の読書への関心を高め、実際に借りるところまでつなげるにはどうすればよいか。

【事務局】

学校と分館・分室をつなげる方法としてよくあるのは、学校に分館・分室へ見学に来てもらうということ。一度来てもらえれば、ここにも本があると知り、利用につながるという事例がある。学校の先生次第ではあるが、比較的近いので図書館見学を企画してもらえませんかという案内をし、見学の人数が少なければ、事前に申込書を書いてもらい、共通利用カードを子どもたちのために作っておくといった手法がある。カードがあると子どもは喜ぶし、使いたいので図書館に行くということもある。様々な仕掛けや方法があるので、本館に相談していただければと思う。

高齢の一人暮らしの方の図書館の利用は非常に大きな問題。地域に分館・分室があるからこそ使っていただきたい。一人暮らしの方はなかなか外に出ないが、外出することで医療費や介護費の抑制につながり、元気づくりや心の安定づくりにもつながる。単純に、本を読まないから図書館には行かないということでなく、図書館では人と集まることができたり、家ではない空間に行くことで気分が晴れたりするなど、様々な効果があるのでぜひ来てほしい。

もう１つは、高齢者の方が読まれる本だが、先ほどおっしゃった活字の大きい本の他に録音図書があり、声と点字の図書館と連携して案内ができる。図書館という場所にも来ていただきたいが、録音図書はデータを入れたUSBメモリーなどを郵送で送ることができる。そういった形で、１階の声と点字の図書館のテーマである「読書を諦めない」という方向へ案内していただければありがたいと思う。

【委員】

ふれあいセンターに親子ふれあい事業がある。夏休みには木工教室を行い、小学校の先生が児童を連れて来てくれることになっている。年に１回そういった形で来ていただいている。しかし、継続的な利用につながっていないということは、子どもに関する事業を実施しても効果が薄く、交通の面での安全管理も必要なので、細かいところも含めて相談させていただけたらと思う。

高齢者について、先日、100歳体操を実施している公民館長と話して団体登録から本の貸出までつながったが、そういった団体への録音図書の貸出や再生機器の問題も出てくるので、解決する知恵を貸していただけたらと思う。

【事務局】

声と点字の図書館では、再生機器をお持ちでない方に機器の貸出も行っている。デイジー図書再生機は100台以上あり、タブレットの貸出もしている。一度試していただき、頻繁に利用されるようであれば購入も検討していただくという流れを作っている。ぜひ試してみませんかという案内をしていただければ。

【委員】

例えば、子どもと高齢者が図書館で出会うことはできるのだろうか。子どもが高齢者に本を読んであげるという試みもできるのではないか。家を出ることが億劫でも、図書館に行けばかわいい子どもたちがいるということなら高齢者の励みにもなるし、子どもは子どもで、おじいちゃん、おばあちゃんがいるからということで安心して来館できる。そんな可能性も少し探ってみたらよいかもしれない。

【委員】

今年も本当に暑く、イオンやオーテピアへ涼みに行こうかという方がいると思う。これほど暑いとたどり着くのも大変だが、オーテピアや地域子育て支援センターなどが生命維持の場になれるかもしれないと思っている。

近くのふれあいセンターでは「いきいき百歳体操」や様々な教室、イベントがあり、そういったときに図書室へ呼び込めたらよいと思う。また、分館・分室でイベントをする際、顔なじみを作りつつ涼めるといった場になっていけばよいと思う。

子どもたちが夏休みに入ると私が考えるのは、子どもたちはどのような機会があれば図書館を訪れるのかといったこと。長い夏休みを、どのような形で読書活動に結び付けられるのか。昔は夏休みの宿題に読書感想文があったが、今は少ないように思う。

【委員】

一時期、夏休みの宿題が多すぎるという意見があり、整理されているところ。香美市では、読書感想文は基本的にほぼ全員の子どもが書いている。

【委員】

以前は読書感想文が子どもたちの負担だったということもあり、少なくなっていると感じた。今の子どもたちの読書の状況や本の貸出状況はどうなのか。また、資料２の１−１の中で電子図書館について、複数人での同時アクセスが可能になったとある。以前は借りたい本を誰かが借りているとなかなか読むことができず、そのうち読みたいという衝動が薄まって読書につながらないということもあったが、解消されたのか。あと、読書マラソンはすてきな取組である。また、高知県にはたくさんの絵本作家や漫画家がおり、絵本作家による絵本づくりのようなイベントもやっていただきたい。

学校では昇降口におすすめの本を展示しており、すてきだと思ったことがある。長い夏休みで、私が心配するのは給食がないという問題。特に、厳しい家庭環境の子ど

もの給食がないことを心配している。解決になるかどうか分からないが、例えば、分館・分室や学校の昇降口での展示において、絵や写真がたくさんあり、内容が簡単な料理本を置いてもよいと思った。コンビニや冷凍食品に美味しいものもあるが、子どもたちが少しでも作ってみようと思えればよい。美味しそうなおにぎりの絵本や写真がたくさんある料理本があれば、目に留まって手に取ってくれるかもしれない。

【委員】

特に、子どもたちの夏休みの過ごし方と図書館との関係という面からの意見だと思うがいかがか。

【事務局】

ほとんどの分館・分室のある施設とオーテピアは「高知市涼みどころ」になっている。暑い日が続くため熱中症対策が重要になっている中、クーリングシェルターという考え方で、暑さ対策のための施設として非常に重要だと考えている。本を借りたり読んだりするだけでなく、場としても使っていただく。涼みどころとして使っていくうちに、地域の方が集まりつながっていく効果も期待される。また、地域の人々をつなぐ結節点として、図書館の役割が重要になってくるのではないかと図書館界でも議論されている。そういった方面への強化は、今後ますます大事になってくると考えている。

子どもたちのための夏休みの企画について、科学館では、自由研究のお手伝いをしている。図書館では、司書が読書感想文の本のアドバイスを行っている。最近は生成AIも利用が広がって出てきているが、本を読み、思ったことを自分の言葉で書くという訓練は子どもの間にしておいた方がよいということは、教育委員会としても言えると思う。図書館に来て、実際に本に触れて読んでいただきたいし、今後も広めていきたいと思っている。

【事務局】

読書感想文で言えば、人気がある本は読みたくても読めないということがあった。

毎年、全国の読書感想文のコンクールに出すための課題図書が指定されているが、課題図書は人気があるため、通常は貸出期間が２週間のところを１週間、貸出点数は１人３点までというルールに変更して、できるだけ多くの子どもたちに読んでもらえるように工夫をしている。

【委員】

簡単な料理のレシピなども分かるような展示が必要じゃないかという意見については、居場所、サードプレイスとしての図書館という活動の点から考えてみてもよいと思う。子どもたちだけでなく、高齢者も一人暮らしの方が食事をするときや何かを作るときのヒントになるものがあれば、出かける楽しみが増えるかと思う。

【委員】

初めてこの会に参加し、丁寧な説明を聞かせていただいた。オーテピアの方が、利用者増に向けて細かな取組をされているということに敬意を表したいと思う。また、昨年度に『あんぱん』が放送され、関連して連携展示を行っていただいたことについて、香美市としてお礼を申し上げたい。

いくつか質問をしたい。まず、子どもから大人まで来館者を増やしていくために様々な取組をしているが、来館している方々の年齢層はどのような年代が多く、どのような年代が少ないのか。例えば、10 代は多いが 70 代は極端に少なく、働いている 30 代、40 代がすごく少ないなど、年代別の入館者の状況はどうか。特定の年代が少ないことが分かれば、そこをターゲットにして入館を促すような取組が進められるのではないかと思った。

次に、久しぶりにオーテピアに来て、改めてすばらしい施設だと思ったし、また来たいと思った。一度訪れるとこの施設の良さが理解でき、二回目も来ようかなという気持ちになる。また来たいと思ってもらえるような、リピーターを増やすための取組を考える必要がありはしないかと思った。

また、先ほどから、保幼小中高大との連携の話も出てきている。将来の利用にかかる継続性という側面から見ても、学校との連携の強化は大きな意味がありはしないかと思った。

以前、香美市で実施した市民に対するアンケートの中で、図書館に望む役割について尋ねた結果、先ほどから話に出ていることと重なってくるが、１位は「さまざまな図書・雑誌・新聞の提供（貸出し・閲覧）」で、回答は候補の中から複数選択できるものだが、こちらの回答が 70%近くあった。２位は「子どもの読書活動の推進」で、市民は子どもに関心がある。３位は「レファレンスサービス」で、調べ物をするときに使える場所だと認識されている。４位は「高齢者・障害者への読書支援」で、自分たちの想像よりも早いスピードで高齢化が進んできている。それから、５位は「地域の人の交流の場」、６位は「地域の情報発信拠点」ということで、まちのイベントや観光情報等とつながった交流拠点にしてはどうかといったものが主だった。香美市立図書館はオーテピア高知図書館と規模が違い、市の人口も２万４千人ぐらいだが、共通するようなところも多々あろうかと思うので話をした。

あと、説明資料にある取組も本当に素晴らしいが、自分はこういった取組を知らなかった。オーテピアの利用促進、充実に向けて、これほど細々と頑張っていることを、自分は 40 年あまり教員をしていたが知らなかった。ということは、市民も、皆さんがこれほど頑張っていることを知らないのではないか。これほど細かな取組をされているので、情報発信をあわせて行い、図書館の利用につなげていければよいと思った。

【事務局】

来館者の年齢構成は押さえていないが、カードを使って図書を借りられた方の年齢層は分かる。多いのは 40 代から 50 代。逆に、少ないのは 10 代から 20 代で、この世代にどうやって図書館を利用してもらうか。10 代は相当数来館しているが、その多くは勉強するためだけに来ており、この世代を本を借りたり、資料を使うというところにいかにしてつなげていくかが大きな課題である。全国的にみても、多くの図書館で同様の課題があり、知恵を絞りながら工夫をしているところである。

まだ来館されたことがない方に、どのようにして図書館へ足を運んでもらうかということについては、SNS を使った広報は手広く行っているが、利用者数を伸ばしていくことは限界にきている印象がある。他にも、関連する様々なイベントに出前図書館として出展し、図書館の使い方についてお知らせして身近に感じてもらい、そして、口コミで広げていくということが、遠回りに見えて、実は着実に利用を広げていく方

法であると思う。そうした口コミで広げていく方法も、一般的な広報と併せて行っていきたいと考えている。

【事務局】

香美市のアンケートの結果について、当館においても同様ではないかと考えている。資料の充実も大事であり、子ども読書活動は県内全域で推進している。レファレンスもまだまだ充実させていく必要がある。それぞれ程度はあるかもしれないが、同じような課題を抱えながら、それぞれの特色を持って進めていけるのではないかと思っている。高知市には分館・分室が数多くあり、本館だけでは地域の方々に届かない部分を担っている。網の目のように広がっている中で、それぞれの特色をどの程度細かく育てるかということにもなってくるかと思う。

地域の情報発信拠点として、図書館が本だけでなく、本以外の情報も発信していくべきではないかという方向に動いている。インターネットで情報収集できる時代ではあるが、生成 AI についても、確実な正解が出るかというとそうではなく、多数の答えが出てくる。SNS についても、自分の好みの思想へ寄せられていく傾向がある。それらは、必ずしもすべての意見を代弁するものではないので、知識の入れ方や情報のあり方も含めて、地域の方々へ必要な情報が届くようにしていきたという思いがある。図書館に望まれる役割として、その辺りはどこも共通ではないかと思う。

また、保幼小中高大との連携の中で、読書の習慣が途切れやすいという課題がある。小学校から中学校、高校へと進む段階で、部活や勉強を理由に教科書以外の本を読まなくなる。これは図書館のティーンズ・サービスにおける課題である。ティーンズに読書への関心を持たせ続けることで大人になっても本を読んでもらう。このことがキーになると考えながら、ティーンズに関心を持ってもらえるよう、ファッションや思春期特有の悩み、部活で上手くなりたいといった思いに応える本を提供している。背伸びをして大人のことに関心が出てくる世代でもあるので、そういったことが分かりやすい本を、特に注意して並べることによって、関心をつなげていこうと取り組んでいるところである。

【委員】

電子図書館と各市町村の図書館との連携についてはどのような状況か。アクセシビリティという面で、障害のある人も電子図書館にアクセスして使えるような状態になっているのか。

本日、オーテピアまで来ることが大変だった。端末などのデバイスを使えない人たちは、地域の図書館や移動図書館を活用すると思う。アクセシビリティという面で、何がどれだけ充実しているのか知らないところがある。各市町村の図書館が、高齢者や視覚障害、肢体不自由のある人に対してどの程度対応してくれるか、分かるのであれば教えていただきたい。

また、若い人たちの利用について、来館はしているが勉強のためであり、「静かで涼しい場所」という話で終わっている。図書館の本の利用へといかにしてつなげていくかということを考えるにあたって、子どもたちの学校図書館の利用状況について教えていただきたい。

自分も、図書館は本を借りるところとか、涼みに来るところというイメージしかなかった。本日の資料に「レファレンス」や「パスファインダー」といった言葉があり、これはなんだろうと思って調べたところ、図書館はいろいろと調べることができるし、調べ方を教えてくれるところだということも知った。勉強のために来ている子どもたちや障害のある人に対して、図書館は様々なことを調べることができ、調べ方を教えてくれるところだという情報発信をさらに充実していく必要がある。

また、パスファインダーなどはどういった媒体で発信されているのか。紙ベースで見て学習を深めていくものなのか。例えば、視覚障害や発達障害のある人が理解しやすい状態で提供されているのか。

なお、私は高知県鍼灸マッサージ師会の会長をしているが、そういった職能団体としても図書館で調べものができると知ったので、今後の活用につなげていきたいと思った。

最近は子どもに限らず、インターネットや ChatGPT を使って調べ物をする。学校でもタブレットを活用し、インターネットを使って調べている。このような状況なので本につながりづらいのかなというイメージがある。ChatGPT を利用したときに、ハルシネーションとして、こちらの意図や期待に合わせて適当なことを教える場合がある。そうした点を調べ直すという場として図書館は有効であるという印象を受けた。その辺りのことについて、リテラシー教育として取り組んでいければよいのではない

かと思った。

【事務局】

電子図書館について、当館が提供している電子書籍サービスは２種類ある。１つ目は従前どおりの貸出型で、インターネット上で２週間貸し出して、占有できる電子書籍サービス。こちらは契約上の制限で、高知県内に在住・在勤・在学の方のみが対象である。そのため、オーテピアの共通利用カードに加え、電子図書館の利用申込みをしていただく必要がある。

２つ目は閲覧型の電子書籍サービス。こちらは、オーテピアの共通利用カードがあれば利用できるもので、高知県内に在住・在勤・在学しているかどうかは関係なく利用できる。閲覧型は見ている間だけ占有し、15 分間操作がなければ自動的に閲覧が終了して、別の人が閲覧できるようになるという電子書籍サービスである。

両方合わせて約１万３千点が利用できる状態なので、ぜひ登録して利用いただけたらと思う。県内の市町村については、須崎市が電子書籍サービスを独自に導入しているが、それ以外の市町村では導入していない。県としては、電子書籍サービスについては県が導入することで全県的に利用していただけたらと考えている。

市町村立図書館等でのバリアフリーサービスについては、取組が広がりつつある。ここ数年の状況として、図書館施設が新しく整備されるところは対面音訳室を設け、また、サピエ図書館への加入も増えている。県全体まで広がっているとは言えないが、年度当初に市町村立図書館等の初任者を集めて行う研修では、メニューにバリアフリーサービスを組み入れており、早い段階でバリアフリーサービスについて学んでもらっている。また、県内３か所で行うブロック別の研修会においても、昨年度はバリアフリーサービスについて学ぶ機会をつくった。

これらの研修は、県立図書館単独で行うことは難しいため、声と点字の図書館と連携し、声と点字の図書館に講師をお願いしながら、各市町村立図書館においてバリアフリーサービスの提供が標準となるように取組を進めているところである。

【事務局】

学校図書館の利用状況については、学校によって違うとしか申し上げられない。積極的に取り組んでいる学校では、学校図書館通信を出すなどして子どもたちに呼びかけ、利用を促す取組を行っている。

高知市民図書館が関わったケースで言うと、学校図書館で書架を構えて、分室の本を置いてもらっている。今まで学校図書館になかった専門的な本などを、学校図書館支援員と分室職員で選定することで、学校図書館の活性化を図っている。学校図書館の書籍購入費は総じて非常に少なく、新しい本を入れづらいという大きな問題がある。学校における裁量も一定はあるが、予算は限られている。そうした状況から、オーテピアや分館・分室の本を活用し、新しい本を子どもたちの元へ届けることが重要ではないかと考えて、支援を行っているところである。

パスファインダーなどは、主には紙や PDF データで提供しており、テキスト版については把握できていないが、文書ファイルがあるので、テキストでの配信希望があれば対応できる。情報取得に障害のある人に対して、パスファインダーなどの活用を拡張していくことは非常に重要だと思うので、これから取り組んでいきたい。

図書館での生成 AI の回答の調べ直しと情報リテラシーの向上について。今後、図書館が行う講座において生成 AI などをテーマとする一方で、本という検証されたものを用いて調べる方法を伝えることは、図書館の重要な役割であると考えているので、今後も引き続き取り組んでいきたい。

【委員】

私はビジネス支援の観点から、第３期計画の策定に向けてコメントをさせていただきたい。特に、サービス指標のあり方についてお話する。

図書館としての基本的な価値にもう一度照準を合わせると、時代が変わっても揺るがない価値とは、蔵書の有効活用にあるのではないかと思っている。様々な立場の方々が蔵書にアクセスできる、そういったアクセシビリティも含めて、図書館の蔵書が一番大きな価値であり、それをいかに活用していくかという点が大事だと思う。

また、貸出冊数やレファレンス件数などの数値が減少傾向にあるという報告もいただいたが、悲観はしていない。なぜなら、意見にもあったが、生成 AI の急速な浸透、あるいは、人口減少なども関係してきていると思う。つまり、社会における知のあり

方そのものが大きく変わろうとしている。

そういう中で、指標として単に数値を増やし続けるという世界ではなくなりつつあると思っている。従って、求められているのは、単なる量の拡大ではなく、オーテピアが持つ蔵書、データベース、そして、職員の皆さんという豊かな資源、知の資産をいかに有効活用し、市民や県民の皆さんの力に変えていくのかということ。まさに、蔵書の有効活用だと思うし、それに向けて、今の時代の変化に合わせ、サービスを質的に変化させて提供していくことが求められてきていると思う。

先ほど電子書籍の話もあったが、よく目的と手段を取り違えてしまい悩んだりする。常に、目的と手段は入れ子構造で、目的を達成するための手段が新たな目的になり、またその手段が、というように考えていく構造である。例えば、電子書籍をたくさん使ってもらうこと自体が目的ではないとも言えると思う。あくまで手段であると考えれば、本質的な目的は蔵書や情報の有効活用になる。

もう少し抽象的に言うと、知的な豊かさを得るというところに収斂されていくのかと思う。そうなってはいないと思うが、定量的な指標ばかりを追い求めるというフェーズではなくなってきている。

オーテピアは、「進化型図書館」や「課題解決の支援ができる図書館」、「セーフティネットの役割を果たす図書館」などを基本方針として掲げており、やるべきことは委員も含めていろいろあると思う。この中で「進化型」というのは、まさに今、進化すべきタイミングだというふうに思っている。特に、生成 AI に関しては、生成 AI と共生しながら進化していくということも求められている。各方面の図書館において、パスファインダー×生成 AI といった取組もあり、生成 AI と賢く共生していく図書館としてもあるべきだろうと思う一方で、デジタルデトックスをするための図書館でもあるべきかと思う。デジタルにも馴染むし、デジタルと離れて思索に耽る場所としてのオーテピアも非常に大事なのではないかと思う。

さらに、高齢者や障害のある方々などもアクセスできるというセーフティネットとしての図書館でもあるべき。この３つの面から、県民・市民を温かく包み込んでいくことが、オーテピアのあり方なのではないかと思う。

第３期計画の策定に向けていろいろと充実した取組が練られているとは思うが、件数や冊数などの定量的な実績といったアウトプットだけに頼るのではなく、定性的な目標とアウトカムも併せて成果を狙っていく。定性的な目標も一定織り込むことで、

さらに進化していくと思う。

ただ、私は、図書館はおおらかであるべきだと常々思っており、職員を PDCA で縛りつけたいという気持ちは毛頭ない。負担のかからないやり方で、定性的な目標やアウトカムを取り入れると、さらに素晴らしい図書館になっていくと思う。

高知に生きる希望を与える図書館だと思うので、私たちも惜しみなく協力していきたい。これからもよろしくお願いする。

【委員】

委員の皆様から、様々な観点からの提言をいただけたと思う。サービス計画推進委員会でも議論をしているが、課題解決型図書館や進化型図書館、生成 AI といった話題が出てくる。しかし、今日いただいた意見の中には、根源的な話もあった。図書館は、本が入手できない方々のために本の閲覧や貸出を無償で提供することが基本であることから、冊数や資料費は、非常に気にしていかないといけない根源的な問題で、非常に重要である。

また、地域の情報拠点という観点では、高知市の場合は分館・分室があり、また、市町村との連携の中でどうしていくかということは困難な課題でもある。

子どもの話題もあったが、私は、別の観点から非常に心配をしている。最近の生成 AI は性能の向上が著しく、文章やレポート作成などでは小学生から大学生まで学習の初期段階は、生成 AI の出力に対抗できるほどの内容にすることはできない。つまり、自分で書くよりも ChatGPT にやってもらうほうがはるかに素晴らしいものができるということを、毎日のように目の当たりにしたときに、果たして耐えられるのか。例えば、読書感想文のように、本を読んで感動した気持ちをまとめて書くといったことをしていないと、そういう知的な活動はできなくなるのではないかと思っている。感想文は ChatGPT に書かせるというように知的な活動を放棄した場合、文字文明が崩壊してしまうのではないか。そんなディストピア（ユートピア（理想郷）の反対語）を考えてしまうという観点からは、次のサービス計画においても、進化型や課題解決型、あるいは、生成 AI との連携はさることながら、地域を支える情報拠点としてのあり方をどう考えていくのか。

生成 AI の時代に子どもたちの教育をどう組み立てていくのか。特に、読書は頭に文

字を入力して自分の考えをまとめる。教育に携わっている方には釈迦に説法だが、文字を学習していないため、いわゆる非識字層は時系列的・論理的に自分の考えをまとめる能力の育成が難しいため、結果として能力が低い。また、記述しないと自分の考えはまとまりにくい。そういった意味で、子どもたちが生成 AI に頼ってしまう仕掛けであるとすると、少子化による影響ということ以上に本に接するという意味での図書館の利用者が少なくなってしまうのではないかと危惧する。そもそも、地域を支える若手の力がなくなってしまうという観点から非常に心配をしている。若い人が少なく、図書館には勉強するために来るが、読書活動は盛んでないということについて、何とかできたらと考えている。

加えて、私自身が気付いていなかったアクセシビリティの観点について、分館・分室や市町村立図書館等との連携は今後の課題だと考える。さらに、現在のレファレンスサービスが発達障害のある方に適合しているのかどうかということはこれまで考えたことがなかったので、非常に重要な観点である。発達障害のある方は５％を超えており（注１）、様々な特性のある方々に対しても図書館サービスを提供していくという観点が必要。とりわけ、レファレンスサービスはコアとなるサービスであり、発達障害のある方に対して、レファレンスサービスをどのように展開していくのか、今後、考えていかなければならない課題である。

（注 1：文部科学省の 2022 年調査では、通常の学級に在籍する小学生のうち、学習面または行動面で著しい困難を示すと教員が評価した児童の割合は 10.4%であった。ただし、これは医学的に発達障碍と診断された児童の割合を示すものではない。ここでの発言趣旨は、図書館サービスの議論の中で、医学的診断の有無にかかわらず、読字・書字、注意、コミュニケーション等に困難を抱える利用者に、図書館がどのように支援を提供するかという点である。）

さらに、委員から伺ったセーフティネットとしての図書館について。私も、デジタルデトックスは非常に大事であると思っている。私の理解では、長期間の生成 AI 利用による、特に子どもの発達についての心理的影響について、世界であまり研究は進んでいないが（注２）、生成 AI を一日中使っていると、心理的に悪影響があるのではないかということが私の仮説である。生成 AI は、使えば使うほど自分よりも優秀なことが多く、自分の専門分野でなければ生成 AI と壁打ちができない。生成 AI が勝つというよりも、スマッシュを打たれてこちらが返せないというレベルになりつつもある。生成 AI については、子どもの教育という観点、あるいは、生涯学習の観点からも考え

ていかなければならないと強く感じた。

（注 2：高性能な生成 AI が広く利用されるようになってからの期間はまだ短く、特に子どもが日常的に生成 AI を長時間利用した場合の知的・心理的発達に対する長期的影響については、十分な縦断的研究の蓄積がないと考えている。そのため、ここで述べた悪影響の可能性は、確立した知見ではなく、現時点における委員自身の仮説である。）

【委員】

一つ思うのは、読書という人間的な行為をどうやって維持していくか。生成 AI の能力自体は、これからますます急速に進歩していくだろうと思う。そういった環境の中で、人間の特徴である言語使用、言語理解、言語運用の典型である読書という行為を、オーテピア高知図書館としてどうやって支えていくのか。人間的な視点から、もう一度図書館の活動について考え、それを生かして第３期計画を策定するようにしたいと思う。

令和８年度 第１回 高知県立図書館協議会・高知市立市民図書館協議会出席者名簿

令和８年７月23日（木）

○委員　　オーテピア　４階　集会室

役　職　等	氏　名（ふりがな）	備考
認定特定非営利法人高知こどもの図書館館長	大木（おおき）　由香（ゆか）	
高知大学名誉教授	加藤（かとう）　勉（つとむ）	
高知市浦戸ふれあいセンター長	葛目（くずめ）　京子（けいこ）	
高知工科大学情報学教授	篠森（しのもり）　敬三（けいぞう）	
元高知市保育園長	神野（じんの）　万里（まり）	
高知市立朝倉小学校長、高知県学校図書館協議会会長	髙橋（たかはし）　祐（ゆう）	欠
特定非営利活動法人こうち企業支援センター理事長	田村（たむら）　樹志雄（きしお）	
フリーアナウンサー、子育て支援員	花房（はなふさ）　果子（かこ）	欠
高知県網膜色素変性症協会会長	林（はやし）　道夫（みちお）	
香美市教育長	前田（まえだ）　圭一（けいいち）	

（氏名五十音順）

○事務局

所　属　等	職　　名	氏　名	備考
高知県立図書館	館　長	杉本　幸三	
	副館長	森本　由香	
	専門企画員（司書育成・サービス推進担当）	尾形　千晶	
	企画調整課長兼チーフ（企画調整担当）	礒野　早多	
	チーフ（総務担当）	吉永　伸子	
	チーフ（図書利用担当）	渡邊　桂子	欠
	チーフ（情報資料管理担当）	渡邊　哲哉	
	チーフ（支援協力担当）	上岡　真土	
	企画調整課　司書	村山　咲穂	
	企画調整課　司書	八田　裕子	
	企画調整課　司書	南　昇平	
高知市民図書館	館　長	小新　貴士	
	図書館・科学館課長	田村　智志	
	副館長	横川　良明	
	図書利用担当係長	川村　紀代	
	図書利用担当係長	川村　美里	
	図書利用担当係長	渡辺　佑介	
	資料管理担当係長	徳平　晶	
	管理担当係長	杉藤　隼人	